

トルコ語発音教材開発のための基礎研究

—現代トルコ語の分節音—

川口 裕司

東京外国語大学外国語学部教授

1. はじめに

本研究は、現代トルコ語の発音教材を開発するための基礎研究である。全体の構成は、東京外国語大学大学院地域文化研究科の21世紀COEプログラム、「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」が発刊した研究報告集、『言語情報学研究報告4 通言語音声研究 音声概説・韻律分析』の中の言語概説の項目に従った。

筆者がハンガリーのトルコ語学者 György Hazaiの言葉¹ を引用して、トルコ語音声学の現状を憂いたのは1988年のことであった。² あれから15年の間に、状況はかなり好転したと言える。もちろん当時においても筆者が未見の優れた論文は多々あった。しかしそれにもまして、最近では本格的にトルコ語の音声を研究する論文が多数現れてきた。巻末に掲げた参考文献はもちろん網羅的なものではない。そこから漏れた優れた研究があるに違いない。いずれにしても近年ではトルコ語の分節音について、かなり詳しい内容が明らかになっている。本稿では先行研究のレビューを行いつつ、トルコ語の分節音に関する知見をまとめた。

2. 使用地域と人口

トルコ語はチュルク系諸言語の1つであり、一般にはアゼルバイジャン語、トルクメン語と同様に、チュルク系諸言語のうちのオグズ語群に分類される。トルコ語の話者は、後に詳述するトルコ共和国の国内はもとより、ブルガリア南部と北東部に約75万人、キプロス北部に約25万人、ギリシャ東部に約15万人いる。またこれとは別に、ドイツやフランスを中心とする西ヨーロッパ諸国に、数百万人に達するトルコ系移民がおり、現地で生まれたトルコ語との二言語併用者も増えている。以上の国々の中で、トルコ語を公用語としているのはトルコ共和国と北キプロス・トルコ共和国だけである。世界中で1億5000万人がト

¹ “Es ist leider eine Tatsache daß eine Phonetik, die unter Einbeziehung der modernen phonetischen Methoden ein ausführliches Bild über den Phonetismus des Türkischen gibt, nicht immer fehlt.”, *Kurze Einführung in das Studium der Türkischen Sprache*, 1978, p.93.

² Yuji Kawaguchi (1988)のp.340を参照。この雑誌の刊行年は1988年とあるが、実際には1991年に出版された。

ルコ語を使用しているという統計もある。

トルコ語の話者が最も多く住んでいるトルコ共和国の総人口は、1998年の統計では6345万1000人であった。このうち主要都市の人口は、イスタンブル³ 827万、アンカラ293万、イズミル213万、アダナ113万（1997年）であった。ただしトルコ共和国の国内には、南東部にクルド語や一部でアラビア語を話す住民がおり、イスタンブルではアラビア語、ギリシヤ語、アルメニア語、ヘブライ語なども使用されている。

3. 規範および方言の概略

11世紀に書かれた Mahmūd al Kāšgarī の『チュルク諸方言概説』のような例外はあるが、長い間、トルコ語の諸方言に関する研究は行われてこなかった。状況に変化が生じたのは、オスマン・トルコ帝国が崩壊し、トルコ共和国が成立した後のことであった。1928年の文字改革に続いて、1930年に「トルコ言語協会」 *Türk Dil Kurumu* が設立されると、協会はアラビア語やペルシヤ語の語彙をトルコ語から排斥し、トルコ語を純化する目的で、アナトリアの諸方言形に注目した。1933-35年にかけて語彙調査が行われ、15万語が選ばれ、それらは『トルコにおける民衆語選集誌』 *Türkiyede Halk Ağzından Söz Derleme Dergisi* 全4巻にまとめられた。その後トルコ言語協会は、知識人や高校教員の助けをかりて、さらに膨大な45万語からなる『選集辞書』 *Derleme Sözlüğü* (1963-82)を刊行した。にもかかわらず、ある研究者の言葉を借りるならば、この辞書は方言学の研究成果というよりは、むしろトルコ語の方言に入った外来要素の分析にとつての源泉とも言うべきものであった。⁴

ごく最近まで方言研究が不在であった結果、⁵ 現状では、トルコ共和国全域の方言特徴や方言区画についてはよく分かっていないことが多い。とはいえたとえば最近では『トルコ語の諸方言』 *Türkçe'nin Ağzıları*, A. Sumru Özsoy, Eser E. Taylan 編、ボアジチ大学出版、2000年のような本格的な方言研究が出版されるようになり、今後の進展が期待される。

以上のことから、ここではトルコ語の規範についてのみ記述することにする。トルコ語の規範に関しては、少なくとも2つの考え方がある。1つは歴史的な見解と呼ぶことができ、もう1つは社会言語学的な見解と言える。

最初の見解では、1453年にオスマン・トルコ帝国が現在のイスタンブルを征服して以来、常に帝国の政治、経済、文化の中心であり続けたイスタンブルの方言が、全国で用いられ

³ イスタンブルの表記は、よりトルコ語の発音に近い。

⁴ “In fact, this dictionary is today also a gold mine for scholars who want to study words of foreign, e.g. Armenian or Greek, origin in Turkish dialects. However, its compilation had very little to do with dialectology.”, Brendemoen, Bernt. (1998) p.236.

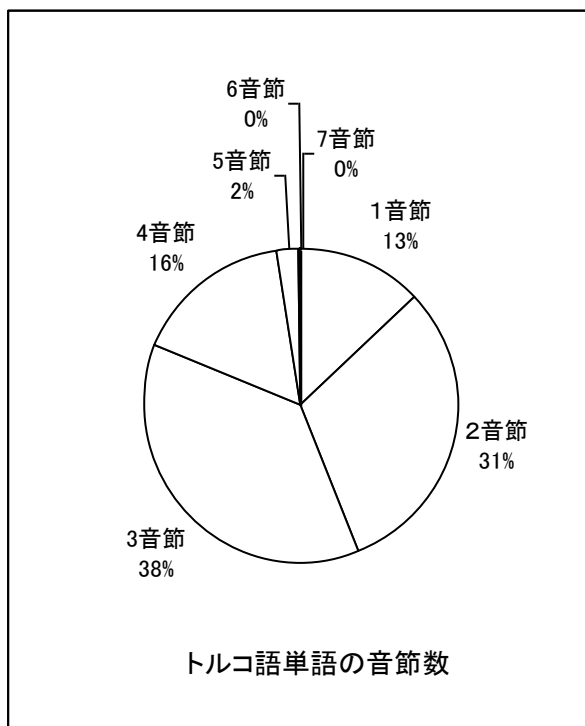
⁵ 1940年以降からアナトリア諸方言の研究が始まったとする見解もある。Korkmaz, Zeynep. (1990) p.388.

る共通語になったと考える。これに対して第2の見解では、その標準的なイスタンブールのトルコ語が時とともに全国に拡大していったのではなく、義務教育の普及、ラジオやテレビといったマスコミの影響のもとに、全国で理解され、通用するようになったという標準語の社会言語学的な形成過程に主眼をおく。筆者は後者の見解が現状により近いと考える。現在ではトラブゾンやディヤルバクル生まれのトルコ人でも、教育を受けた者であれば、標準トルコ語(Ölçünlü Türkçe)を使用することができるからである。

4. 音節構造

少し古い統計になるが、トルコ歴史協会が出版した『正書法の手引き』 *İmlâ Kılavuzu* (1956) Türk Tarih Kurumu Basımevi の中に出てくるトルコ語の単語と音節数の関係を調査した研究によれば、⁶トルコ語では3音節から成る単語が最も多く、3音節>2音節>4音節>1音節の順に減ってゆく。6音節・7音節以上の単語は1%にも満たなく、2・3・4音節語の総計は単語全体の85%に達するという。右図を参照。

次に音節構造について概観する。



4. 1. 単音節語

上述の『正書法の手引き』の調査によれば、以下の8種類の音節構造が観察されたが、出現語数に大きな差がある。すなわち、CVC型(61%)>CVCC型(19%)>VC型(11%)>CCVC型(4%)>VCC型・CV型(それぞれ2%)>V型・CCVCC型(それぞれ1%)の順に単語数が減少する。

単音節語で圧倒的に出現数が高いのはCVC型(kar「雪」, kol「腕」)であり、次に大きく水をあけられてCVCC型(kırk「40」, dört「4」)が、それに続いてVC型(eş「片割れ」, on「10」)が現れる。実際に出現数が多いのはここまでで、続くCCVC型(klüp「クラブ」, krem「クリーム」)は外来語にのみ見られ、CV型(su「水」, ve「そして」)とVCC型(art「うし

⁶ Selen (1968) のこと。但し、丁寧に見ると筆者の挙げる数値の統計に若干の矛盾が生じていることが分かる。

ろ」, örs「金とこ」)も単語の数は多くない。さらにV型(o「彼」, e「じゃあ」)とCCVCC型(bronş「気管支」, bronz「ブロンズ」)に至っては借用語や間投詞がほとんどである。他にもCCV型(bre「おい!」, gri「灰色の」)があるがほとんど現れない。

これらをまとめるならば, 単音節語の一般的な音節構造はCVC型, CVCC型, VC型のいずれかであると言えよう。この3つで全体の91%に達する。

4. 1. 2 音節以上の語

基本的には単音節で観察された構造が連結して2音節以上の語が形成されるわけだが, ここでも音節タイプの現れには階層化が見られる。Demircan の記述⁷によれば, 単音節語や語頭ではCV型(ge-le-me-di「彼は来ることができなかった」)が52.9%と最も頻度が高く, 続いてCVC型(gel-di「彼は来た」, tut-tu「彼は捕まえた」)が37.1%で双璧をなすという。一方, 語中でもCV型(gü-ve-ne-mi-yo-rum「私は信頼することができない」)が38.9%, 続いてCVC型(in-cit-mek-si-zin「感情を傷つけることなく」)が28.3%, CVCC型(ka-çirt-ma-dan「逃がさせることなく」)が12.5%で, この3つのタイプで全体の79.7%を占める。以上をまとめると下表のようになるう。

位置	音節型
単音節語	CVC, CVCC, VC
語頭	CV, CVC
語中	CV, CVC, CVCC

Gerjan van Schaaik は最近の研究書で, トルコ語には4つの音節型, V, CV, VC, CVCがあるとしているが, このうちV型は2音節の語頭(a-kım「流れ」, i-zin「許可」)に現れるが頻度はそれほど高くない。⁸

ところで, この4つの音節タイプの中には, 単音節語と語中音節に見られるCVCCタイプが抜け落ちているが, それにはわけがある。この音節末尾に現れる-VCCには音韻論的な制約があるためである。語末の2子音の連続には2つのタイプが観察される。1つはgenç「若い」のような鳴音+阻害音であり, もう1つはdost「友」のような無声摩擦音+閉鎖音である。このことから音節末の位置に現れる2つの子音は, 両方が鳴音であったり, 阻害音であったりすることはない。このように

⁷ Demircan (1979) pp.30-31.

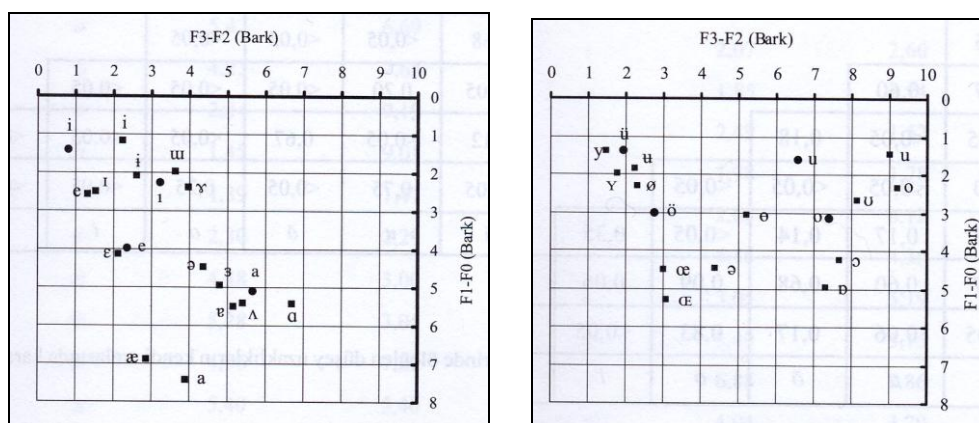
⁸ van Schaaik はCCV型は外来語のみに現れるとする。van Schaaik (1996) p.118.

CVCC 型には他の音節タイプには見られない、音節内部の音素に共起制限があるために、他の音節タイプとは切り離して考えることが多い。この共起制限はアラビア語の借用語に見られる音節の組み換えを説明するときの重要な論拠になる。例、アラビア語 *emr* → トルコ語 *emir* 「命令」、*em-ri* 「その命令を」、アラビア語 *kayb* → トルコ語 *kayıp* 「紛失」、アラビア語 *resm* → トルコ語 *resim* 「絵」、*res-mi* 「その写真を」。アラビア語における語末の子音連続は、トルコ語における音節末の共起制限によって、子音連続の間に母音が挿入され *emr* > *emir*, *kayb* > *kayıp* となった。トルコ語でもこれと類似の現象があるため、この共起制限はなお一層の信憑性がある。たとえば *alın* 「額」と *al-nı* 「その額を」、*burun* 「鼻」と *bur-nu* 「その鼻を」である。ここでは明らかに、鳴音の連続 *-ln*, *-rn* が音節末(単音節語末)に現れないようにするために、母音を挿入し、*a-lın*, *bu-run* になったと考えられる。林 (2000) p.1386 では、使用頻度による階層化こそされていないが、子音音素クラスターの一覧表が掲載されており有益である。

5. 母音

5. 1. 短母音音素

最近の研究⁹ において、トルコ語の短母音と IPA の母音表記¹⁰ がどのように関連づけられるかが比較され、トルコ語の短母音に最も近い IPA の母音表記が提示された。もちろん、ここでは後に詳述するそれぞれの短母音の結合変異体は等閑視されている。下図の●がトルコ語の短母音を表し、■が IPA 表記である。



Kılıç (2003) p.13

⁹ Kılıç (2003)を参照。

¹⁰ 比較の基準としたのは CSL (Computerized Speech Lab, Kay Elemetrics, Model 4300B) 付属の IPA Transcription Tutorial と国際音声学会による CD 版 The Sounds of the IPA のデータであった。

これらをまとめると以下の対応表ができる。

		短母音 [IPA]		
		前舌	後舌	
狭	/i/ [i]	/ɪ/ [ɪ]	非円唇	
広	/e/ [ɛ]	/a/ [ɑ]		
狭	/ü/ [y]	/u/ [u]	円唇	
広	/ö/ [œ]	/o/ [ɔ]		

トルコ語の/e/, /o/, /ö/はいずれも広い母音である。¹¹ また/o/と/ö/は、第1音節以外の位置に現れない。ただし進行中の動作を表す動詞接尾辞 **-Iyor** や名前につく愛称の指小辞、例 **Fatoş ← Fatma** は例外である。¹²

研究者によっては母音の /ɪ/ を中舌母音に分類する者もいるが、¹³ 最新の磁気共鳴画像 (MR)を用いた研究¹⁴ により、この母音が後舌母音であることは明らかと思われる。¹⁵ Tekin (1958)はパラトグラムによる母音研究の草分けであるが、彼の記述を見ても、/ɪ/ は後舌母音であることがわかる。

Die Bildung des ɪ, das in seiner Klangwirkung dem russischen ы ähnlich ist, erfolgt, indem sich die Zunge ein wenig zurückzieht und sich nur in ihrem hinteren Teile etwas anhebt. Dabei berührt sie die äußersten Ecken des hinteren Gaumens. (...) (Tekin (1958) p.198)

5. 2. 短母音の結合変異体

次に、短母音の結合変異体について詳述する。まず前舌母音を解説する。

¹¹ 歴史的には狭い e が弁別的機能を果たしていた。この狭い /e/ は標準的なトルコ語には存在しないが、アナトリアの諸方言で残っている。例, el [el]「他人」と el [ɛl]「手」。

¹² Csató and Johanson (1998) p.203.

¹³ この点について微妙な立場の研究者もいる。“Arkadil ünlüleri arasında yer alan /ɪ/ ünlüsü çıkış yeri açısından ortadil (medium vowel) ünlüsü olarak da görülebilmektedir (Selen, 1979: 21).”, Ergenç (2002) p.21 を参照。

¹⁴ Kılıç (2003)の図 4 を参照されたい。

¹⁵ ただし擬声語、擬態語の音素構造においては、/ɪ/ があたかも前舌の /i/ の代わりをし、後舌の /a/ と対比的に用いられる例が少なくないことも指摘しておく。çıtır çıtır「パキパキ」と çatır çatır「パキパキ」、fısır fısır「シューシュー」と faşır faşır「ジャージャー」、pıtırtı「コツコツ」と patırtı「ドタバタ」。Kawaguchi (1988)を参照。

5. 2. 1. 前舌母音

5. 2. 1. 1. /i/

iplik 「糸」という例を挙げて、母音 /i/ が「広い açık」母音になることがあるとする研究者がいるが、¹⁶ 理解に苦しむ。この音素には結合変異体はなく、常に[i]として実現すると思われる。

5. 2. 1. 2. /e/

これについて最大3つの変異体を区別する学者がおり、ekmek 「パン」の最初の母音は狭い[e]とする。筆者の観察でも「広い」と「狭い」音色が聞かれる。ただし狭い音価として実現されるのは、主に硬口蓋接近音 /y/ の前後に現れた場合である。例、yemek 「食べる」の第1音節やbey 「～さん」のときの /e/ は狭い。

5. 2. 1. 3. /ü/

常に [y] として実現される。

5. 2. 1. 4. /ö/

一般に広い [œ] の実現形をもち、唇の丸めは強くないが、硬口蓋接近音の /y/ の前後で狭い音色になる。例、köy [køj] 「村」、öyle [øjlɛ] 「そのような」。

5. 2. 2. 後舌母音

5. 2. 2. 1. /ɨ/

常に [ɯ] として実現される。

5. 2. 2. 2. /a/

2つの変異体が観察される。1つは舌背の前部で狭めが形成される前寄りの[a]であり、もう1つは舌背の後部で狭めが作られる後寄りの[a]である。先に引用した Kılıç (2003)の磁気共鳴画像(MR)による調音部位の研究では狭めが舌背の後部で実現している。すなわち[a]がトルコ語の一般的な /a/ の調音であることがわかる。前寄りの[a]は主に外来語に見られる。注意すべきは、まれではあるが、この2つの /a/ が最小対をなし、弁別的機能を担う場合があることである。例、kâr [kaɾ] 「利益」とkar [qaɾ] 「雪」。¹⁷

¹⁶ Ergenç (2002) p.23.

¹⁷ しかしながら例からも分かるように、両者は母音の音色のみならず、子音/k/の音価も異なっているた

5. 2. 2. 3. /u/

常に[u]として実現される。

5. 2. 2. 4. /o/

一般に広い母音 [ɔ] の実現形をもち、唇の丸めは強くないが、硬口蓋接近音の /y/ の前後で狭い音色になる。例, boy [boj] 「背丈」, yok [jok] 「ない」。

結局のところ、トルコ語の短母音は開口度の大きい母音 (/e/, /ö/, /a/, /o/) が結合変異体を持っている。母音の開口度が大きい分だけ、より広い調音領域を確保できているために変異体が生じると考えられよう。このような一般的傾向は様々な言語に見られる。

5. 3. 長母音

トルコ語には5. 1. の短母音に対応する8つの長母音がある。しかし長母音は一般に外来語にだけ見られ、トルコ語の固有語彙にはない。あまり機能負担は高くないが、長母音と短母音による最小対を見出すことができる。¹⁸

長母音	短母音
âdet 「習慣」	adet 「個数」
âlem 「世界」	alem 「旗」
hâlâ 「いまだに」	hala 「叔母」
şûra 「評議会」	şura 「そこ」

ほとんどのトルコ語学者は標準的なトルコ語には二重母音はないとする。したがって以下の例に出てくる母音連続は、2つの母音として音韻解釈される。例, ait [ait] 「～に関する」, laik [laik] 「政教分離の」, sual [sual] 「疑問」, süet [syet] 「スエード皮の」。

1) トルコ語には硬口蓋接近音 /y/ が音素として存在する。2) 上記の語中の/i/が [j] と

め、音韻論的に言えば、両者は厳密な意味で最小対をなしていない。この音素/a/の変異体が、音素なのか、あるいは先行する子音の結合変異体なのか、意見の分かれるところである。

¹⁸ Ergenç が指摘するように、現代のトルコ語では、本来長母音であったアラビア語やペルシア語の母音が短音化する傾向が見られ、将来的に短母音の語彙が拡大する可能性がある。"Yabancı dillerden aldığımız sözcüklerde bulunan uzun ünlülerin bir bölümü bu uzunluklarını korurken bir bölümü ise günümüzde artık kısa sesletilmektedir. Örn. /memur/, /hakim/, /ahenk/ gibi sözcüklerdeki ilk ünlüler uzunluklarını korurken ihmal, kelam, metruk gibi sözcüklerin ikinci ünlüleri eski uzunluklarını kaybetmişlerdir.", Ergenç (2002) p.37.

音的に明らかに異なる。3) 両唇接近音の [ɥ] がトルコ語にない。4) 両唇接近音の [w] は子音 /v/ の結合変異体である。以上の条件から母音連続としての音韻解釈が成り立つ。

他方、二重母音が存在しないため、たとえばフランス語の借用語において、もともとの [wa] が母音連続 [ua] に変わっている。例, coiffeur [kwafoœr] → kuaför 「理容師」, soirée [sware] → suare 「夜会」。

6. 母音調和

語幹およびその拡張である接辞において、同種類の母音だけが共起する現象を母音調和と呼ぶ。トルコ語の母音調和は、1) 語幹内部の母音調和と2) 語幹と接尾辞の間の母音調和の2種類がある。

6. 1. 語幹内部の母音調和

林(2000)によれば,¹⁹ 語幹内部の母音調和には次のような制約がある。

- 1) 語幹内部の母音は、すべて前舌母音か、後舌母音であり、前舌母音と後舌母音が共起することはない。これは母音調和における最も重要な制約である。これを第1の母音調和あるいは「深さまた口蓋の母音調和」と呼ぶ研究者もいる。²⁰

前舌母音	後舌母音
/i/, /e/, /ü/, /ö/	/ı/, /a/, /u/, /o/
ipek 「絹」, üye 「メンバー」	arı 「ハチ」, oda 「部屋」

- 2) 第2音節以降の狭母音 (/i/, /ü/, /ı/, /u/)は、先行する母音にあわせて円唇か非円唇になる。

これは「唇の母音調和」と呼ばれる。²¹

¹⁹ 以下の記述は林(2000) pp.1386-1387 に負うところが大きい。林は第3の制約として、「/a/の後に唇子音(/p/, /p/, /v/など)があり、その後には狭母音が続くとき、狭母音は少数の例外を除き、円唇母音/u/になる」を挙げている。この第3の制約は他の2つと比べて適応範囲が狭く、現代トルコ語で機能していないと思われるため省略した。たとえば、ペルシャ語の havic がトルコ語に借用され, havuç 「ニンジン」になったことから、この制約は借用の当時には効力があつたと考えられる。しかし kapu 形が 20 世紀初頭に kapı 「門」に変化したように、20 世紀に入るとこの第3の制約はすでに化石化していた可能性が強い。

²⁰ Deny (1955) pp.61-62 を参照。

²¹ Deny (1955) p.66. 歴史的には「深さの母音調和」が古く、オルホン碑文の時代にすでに存在しており、「唇の母音調和」は新しいとされる。

例 temiz 「清潔な」(先行母音が前舌の非円唇母音の[e]であるため, [i]になる。)

ayı 「熊」(先行母音が後舌の非円唇母音の[a]であるため, [ɨ]になる。)

ödün 「賠償」(先行母音が前舌の円唇母音の[ö]であるため, [ü]になる。)

odun 「薪」(先行母音が後舌の円唇母音の[o]であるため, [u]になる。)

この制約が見られない語彙は外来語の可能性はある。

例 kenar 「縁」, tane 「つぶ」(前舌母音 /e/ と後舌母音 /a/ が共起する。)

nüfus 「人口」(第1音節が前舌円唇母音 [ü]であるのに, 第2音節が[u]である。)

turist 「旅行者」(第1音節が後舌円唇母音 [u]であるのに, 第2音節が[i]である。)

6. 2. 語幹と接尾辞の間の母音調和

上の2つの制約は語幹の最終母音と接尾辞母音の間にも観察される。しかし語幹内部の母音調和との相違は明らかである。語幹内部の母音調和は語彙的であるのに, 語幹と接尾辞の間の母音調和は文法的と言える。文法的であるがゆえに, トルコ語の中に入った外来語に対しても, 若干の例外を除いて, この母音調和の規則が適用される。接尾辞は必ず第2音節以下の部分に現れるため, 5. 2. で述べたように/o/, /ö/の母音は排除され, 結果として接尾辞に現れる母音は以下の2系列になる。

1. 「前舌・後舌」	2. 「前舌・後舌・円唇・非円唇」
/e/, /a/	/i/, /ɨ/, /u/, /ü/

たとえば複数形を表す接尾辞 -ler / -lar は「前舌・後舌」系列であり, 限定の直接目的語を表す接尾辞 -i, -ı, -ü, -u は, 「前舌・後舌・円唇・非円唇」系列に属する。重要なことは, 一目見て外来語とわかる単語にまで, この母音調和の規則は厳格に適用されるという点である。

単数形	複数形
ip 「紐」, ev 「家」, ütü 「アイロン」, örs 「金とこ」	ipler, evler, ütüler, örsler
kız 「娘」, at 「馬」, uç 「先」, ot 「草」	kızlar, atlar, uçlar, otlar
radio 「ラジオ」, turist 「旅行者」	radıolar, turistler

	限定の直接目的語 「その～を」
il 「県」, ev 「家」, üzüm 「ブドウ」, ön 「前」	ili, evi, üzümü, önü
kız 「娘」, ay 「月」, ur 「腫れ物」, oy 「票」	kızı, ayı, uru, oyu
lider 「リーダー」, otobüs 「バス」	lideri, otobüsü

接尾辞の中には若干ではあるが、母音調和に従わないものがある。たとえば、継続の動作を表す -(I)yor (例, gidiyor 「彼(女)は行きつつある」), 名詞の語幹について時間や空間の, 形容詞をつくる -ki (例, akşamki 「晩の」), 名詞の語幹について時の副詞をつくる接尾辞 -leyin (例, sabahleyin 「朝に」) などである。

7. 子音音素

トルコ語の子音体系は下表のようになろう。しかし、このうちのいくつかの音素に関しては、現在でも音韻解釈をめぐる意見の一致を見ない。

トルコ語の子音

調音位置	唇	歯・歯茎	前部硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	/p/, /b/	/t/, /d/		/k/, /g/	[ʔ]
破擦音			/ç/ [tʃ], /c/ [dʒ]		
摩擦音	/f/, /v/	/s/, /z/	/ʃ/ [ʃ], /j/ [ʒ]		/h/, /:/
鼻音	/m/	/n/			
ふるえ音			/r/		
側面音			/l/		
接近音			/y/ [j]		

(/ç/, /c/, /ʃ/, /j/, /y/ は綴り字を音素記号としているため []内に発音を付した。)

7. 1. 声の相関

声の相関が観察される子音は閉鎖音と破擦音と摩擦音の系列であり、具体的に言えば /p/ ～/b/, /t/ ～/d/, /ç/ ～/c/, /k/ ～/g/, /f/ ～/v/, /s/ ～/z/, /ʃ/ ～/j/ である。しかしこのうち最小対が比較的容易に見つかるのは, /p/ ～/b/, /t/ ～/d/, /ç/ ～/c/, /k/ ～/g/, /s/ ～/z/ だけである。

声の相関を表す最小対

/p/~/b/	pul「切手」～bul-「見つける」
/t/~/d/	at「馬」～ad「名前」
/ç/~/c/	çan「鈴」～can「魂」
/k/~/g/	keçe「フエルト」～geçe「過ぎ」 ²²
/s/~/z/	sor-「尋ねる」～zor「難しい」 ²³

上表の子音の中で、軟口蓋閉鎖音 /k/~/g/ は、しばしば後部硬口蓋音の /k/~/g/ と軟口蓋音の /q/~/ğ/ の2系列に分けて記述されることがある。²⁴ しかしながら林 (2000)も述べているように、両者は稀に最小対が見つかるものの、²⁵ 基本的には1つの音素の結合変異体と解釈できる。後部硬口蓋音は前舌母音とともに、軟口蓋音は後舌母音とともに現れるからである。したがって両者は2つの異なる音素ではなく、単一音素 /k/ と /g/ の文脈的変異と考えることができ、そうした変異が生じる原因を両者自身にではなく、周りの音声的文脈（前舌母音か後舌母音か）に求めることができる。

最近の研究²⁶ によって、トルコ語の閉鎖音 /p/~/t/~/k/ と /b/~/d/~/g/ の音声特徴が詳細になってきた。一般に、多くの言語において閉鎖音に、無声帯気音、無声無気音、有声無気音の3種類の実現形があることが知られているが、トルコ語ではこの3つの実現形は次のような分布を示すことが実験的に確かめられた。

²² ただし後に見るように、geçe の /g/ が無声無気音として実現しなければの話である。

²³ 形態音韻的要因を完全に排除し、もし他に相応しいペアがあるのであれば、語幹 bul-, sor- を最小対として挙げるのは避けたほうがよい。もっともトルコ語では語幹だけで命令法2人称単数形として実際に独立形式として用いられ、/l/ と /r/ は動詞の語幹末子音であり、かつ2つの最小対は明らかに形態音韻的交替形ではないため、最小対と考えても差支えはないと考える。これらの子音については比較的容易に最小対を見つけることができる。しかしながら、もし最小対となる語彙をトルコ語の固有語彙に限定し、全ての外来語を除くならば、事態は容易ならざるものになる。多くの研究者がしばしばトルコ語の音韻体系の解説において、固有語彙だけの体系と外来語を含む体系とを区別することがある。こうした区別は、単一の言語において、複数の異なる音韻体系が共存することの証拠として興味深い、とくに前者は音韻論の方法を厳格に適用して音素を抽出しようとするとき、大きな困難を伴うと言ってよい。

²⁴ 林 (2000) p.1384 や Csató & Johanson (1998) p.204 を参照。

²⁵ kâr [kar]「もうけ」～kar [qar]「雪」のような場合である。

²⁶ Kallestinova (2003)のこと。

実現形	実現位置	例
無声帯気音	語頭	pul「切手」, tat「味」, kutu「箱」
	語中	sapar「sapmakの超越時制形」, atar「atmakの超越時制形」, hakikat「真実」
	語末	sap「茎」, at「馬」, kürk「毛皮」
無声無気音	語頭	dağ「山」, güç「力」
有声無気音	語頭	bir「1」
	語中	sabaj「将校」, gider「gitmekの超越時制形」, gaga「嘴」
	語末	ad「名前」, lig「リーグ」 ²⁷

この実験結果に従うならば、先に挙げた最小対 keçe「フエルト」～geçe「過ぎ」は、帯気音と無気音の対立であり、声の対立ではない。また /k/～/g/ は、語末位置に有声の /g/ が現れないため、声の相関は語中位置でしか立証できない。

結局のところ、こうしてようやく声の相関を表す最小対が見つかるのは、上に述べた /p/～/b/, /t/～/d/, /ç/～/c/, /k/～/g/, /s/～/z/ である。では残りの対立 /f/～/v/, /ş/～/j/ はどうなのだろうか。

7. 2. 音素 /j/, /v/, /ş/, /j/

/ş/～/j/ の音韻対立をみつけ、音素認定を行うことが困難なのは、音素 /j/ [ɟ] がフランス語からの借用語に見られる音だからである。語末では次のような最小対が見つかるものの、この音韻対立の機能負担はひじょうに小さいと言えよう。例, beş「5」～bej「ベージュ色」。

音素 /v/ に関しては、最近、興味深い音響学的研究が発表された。²⁸ 内容を詳しく引用しておく。アナトリア大学(Anadolu Üniversitesi)教育学部の男子学生2名と女子学生1名を被験者とする実験である。『トルコ語辞典』*Türkçe Sözlük* (1988)から /v/ を含む39個の単語を選び、そこに /v/ のない単語を21個加え、60語のランダム・リストを7つ用意した。それを Lüften _____ der misiniz? 「お願いします、～と言いますか?」という文脈で、1人につ

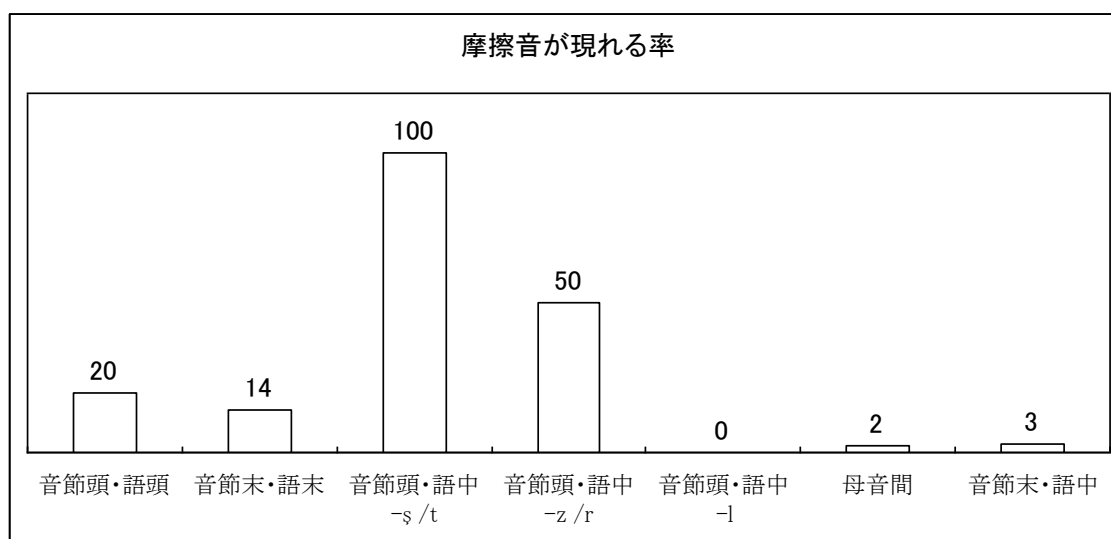
²⁷ 語末位置に両唇有声閉鎖音 /b/ は現れない。またトルコ語では語末の位置に有声音が現れる単語が非常に少ない。このように声の相関が語末位置で機能負担が小さいにもかかわらず、at「馬」～ad「名前」は明らかに最小対を形成する。

²⁸ Kopkallı-Yavuz (2000)を参照。

いて4回繰り返して発音してもらい録音した。そのデータをスペクトルグラフ分析したところ、以下のような結果を得た。

まず音節頭・語頭および音節末・語末の位置では、それぞれ465回の実現の80%と86%が摩擦のない継続音であった。上唇と下歯の接触が見られず、両唇によってごく弱い狭めを伴うものの、摩擦音がかすかに聞こえるか、あるいはほとんど聞き取れない。両唇の接近音 [w] に近い音で、通常 [v] と表記される。調査対象となった単語で言えば、vatan [vatan] 「祖国」やvücüt [vydzyt] 「身体」の語頭音，sınav [sınav] 「試験」やödev [œdev] 「義務」の語末音である。

この語末の無摩擦音に対して，teşvik「激励」やcetvel「定規」などのように /v/ が無声摩擦音 /s/ あるいは閉鎖音 /t/ の後に来ると，必ず摩擦音 [v] として実現される。それ以外の pazval や nervür では摩擦音と無摩擦音の間で揺れが見られるという。



母音間や音節末・語中では，摩擦音として実現することはないと考えてよい。母音間の例としては kovan 「kovmak (追い払う)の連体形」やsavan 「savmak (遠ざける)の連体形」があげられる。²⁹ 一方，音節末・語中では2つの場合が考えられるという。1つは無摩擦音 [v] であり，もう1つは子音が脱落して前の母音が長くなる。これは /v/ が唇子音の前に現れたときである。kovmak 「追い払う」やsevmek 「愛する」では，/v/ は脱落し，代償延長によ

²⁹ Underhill (1976)や Demircan (1996)は母音間における音色を [w] と表記する。Selen (1979)は Bergstraesser や Swift の伝統的記述を引用しつつ，母音間で /v/ は脱落するか，[w]になるとする。"Adı geçen ünsüz iki ünlü arasında genellikle düşer (Bergstraesser, 1918, S. 235) özellikle [v] nin arasında kaldığı ünlülerden biri yuvarlak, öteki düz ünlüyse, ya birer bağımsız hece oluşur, ya da [v] nin düşmesi nedeniyle yan yana kalan ünlüler, ünlü kayması oluşturur. Söz gelimi tavuk [tɑ-vuk] ya da [təvk] gibi. (Swift S. 11) adı geçen ünsüzün içseste, yine /v/'nin iki ünlü arasında çift dudak sızmalı bir ses olarak duyulduğunu söyler." Selen (1979) p.98.

り前の母音 /o/ と /e/ がそれぞれ29%, 27%だけ長音化した。³⁰ この子音脱落と母音の長音化はすでにSezer (1986)やvan der Hulst et van de Weiger (1991)により報告されている。

最後に音素 /v/ の結合変異体をまとめておく。

/v/ の変異体

位置	結合変異体	例
音節頭・語頭, 音節末・語末	[v]	vatan, vücut, sınav, ödev
音節頭・語中で /s/, /t/ の後	[v]	teşvik, cetvel
音節頭・語中で /z/, /r/ の後	[v]と[v̥]の揺れ	pazval, nervür
母音間	[v]	kovan, savan
音節末・語中で唇子音の前	脱落	kovmak, sevmek

このような結合変異体をみる限り、たとえば af「赦し」～av「狩」、kafa「頭」～kaval「牧童笛」は、摩擦音の声の相関を表す最小対と呼ぶことができないことになる。

7. 3. 鼻子音

鼻子音の系列には、/m/ と /n/ がある。母音間で、たとえば ama「しかし」～ana「母」を最小対として挙げることも可能であろうが、前者はアラビア語起源であり、かつストレスが語末にはなく第1音節にあるため、たとえば擬似的な対であるが yamaç「山の斜面」～yanak「頬」を挙げておく。語末では am「女性器」～an「瞬間」の最小対が見つかる。しかし語頭位置では擬似的な対、meme「乳首」～nere「どこ」によって、なんとか両子音の対立が認定可能となる。

ところで特に語頭において /m/ と /n/ の最小対が見つけないのは、トルコ語では元来、語頭位置に /m/, /n/ が現れなかったからである。Selen (1979) p.89を参照。確かにTürkçe Sözlük (1983) 第7版のm, n の項を調べてみても外来語が圧倒的な比率を占める。とはいえ meme や nere 以外にも, mırıltı「つぶやき」, mızız「口うるさい」, mutlu「幸せな」, nacak

³⁰ 菅原(2000)は正書法の規範の変遷を扱った数少ない報告である。「例えば döğmek～dövmek, oğmak～ovmak, öğmek～övmek のようなヴァリエーション形式について、93年版『手引き』が「共通発音において v をもつ形式がより普及している」点から dövmek, ovmak, övmek のように書くことが「必要である」(p.11)としているのに対し、2000年版は「共通発音において v をもつ形式がより普及している」ものの、ğ をもつ形式も「消滅したわけではない」(p.14)と述べるにとどまっている。言い換えれば、2000年版はその「規範」としての性格を弱めているのである。」 p.186 参照。

「なた」、nasıl「どんな」、ne「何」、nesne「もの」、nice「どれほど」、nine「祖母」、nisan「4月」、niye「なぜ」などの固有語彙と考えられる単語を見つけることは可能である。

興味深いことだが、鼻子音のうち、複数の結合変異体が観察されるのは常に/n/である。特に音節末では後続する子音が唇子音のとき、/m/ と /n/ の対立は中和し、[m]のみが現れる。例、günbegün [gymbɛgyn]「日ごとに」、inmek [immɛk]「降りる」、önbilgi [œmbilgi]「予備知識」、pinpon [pimpɔm]「よぼよぼの」、tonbalığı [tɔmbalɯ:]「マグロ」。これに対して /m/ は結合変異体を持たない。たとえば imdat [imdat]「救助」、imtihan [imtiħan]「試験」では常に子音連続 [md]と[mt] が現れ、semt [sɛmt]「地区」でも語末の連続は [mt]である。³¹ 一方、音素 /n/ は /g/ の前で軟口蓋の鼻子音 [ŋ] として実現される。例、hangi [haŋgi]「どの」、yangın [jaŋgɯn]「火事」。

7. 4. /r/

音素 /r/ の変異体については意見が一致している。3つの変異体が以下の文脈に現れる。

/r/ の変異体

文脈	実現形	例
語頭	[r] ³²	rahat「安心」、rıza「同意」
語中・音節末	[ɾ]	kara「黒」、orta「真ん中」
語末	[r̥] ³³	nar「ザクロ」、var「ある」

話ことばでは語末の-r が脱落することもある。特に次の表現において頻繁に起きる。³⁴

³¹ 研究者の中には、歯音の前で /m/ が両唇音ではなく、唇歯音 [ɱ] の結合変異体として実現するとする者もいるが、筆者の観察では必ずしも唇歯音と認定できないことが多い。/n/ の変異体に関する記述は Demircan (2001)と Selen (1979)に基づいている。また最近出版された発音辞典 Ergenç (2002)では、音節末の /n/ を n で音素表記しつつ、別の箇所では n > m の同化を説明している。Ergenç (2002) p.41 を参照。トルコ語では amnezi [amnezi]「健忘症」、emniyet [emniyet]「安全」、memnun [mɛmnu(:)n]「嬉しい」などでは順行同化 -mn- > -mm-は起きない。

³² 有声の弱いふるえ音で震える回数は少ない。これを接近音とする研究者もいる。

³³ 弱いふるえ音で無声化しており、語頭音と異なり震える回数が多い。

³⁴ これらは個別の語彙に限って起こる音声現象であり、語末の /r/ 脱落という規則的な音声現象ではない。Van der Hulst & van den Weijer (1991) p.32.

語末 -r の脱落

継続形の-yor	gidiyor → gidiyo 「彼（女）は行く」
bir 名詞	bir tane → bi tane 「1個」

7. 5. /l/

7. 1. で解説したのと同様のことが音素 /l/ について言える。口蓋化した前部硬口蓋音 /l/ は前舌母音とともに現れ、前部硬口蓋音 /l/ は後舌母音とともに現れる。kabul [qabu] 「承認」～bu1 [bu1] 「見つける」のような若干の最小対はあるが、前者はアラビア語からの借用語である。ここでも両者は単一音素 /l/ の結合変異体と解釈して差し支えないと考えられる。

7. 6. /y/

Selen (1979) のように二重母音と「母音＋接近音」の両方の可能性を併記する研究者もいるが、³⁵ 5. 3. で述べたように、標準的なトルコ語には二重母音がないという解釈が一般的である。またトルコ語には母音連続が存在し、接近音 /y/ が語頭、語中、音節末、語末の全ての位置に現れるため、二重母音解釈は必要がないと考えられる。³⁶

7. 6. [ʔ], /h/, /:/

ここでは声門系列の3音素の音韻解釈をめぐる諸問題をまとめておく。

7. 6. 1. [ʔ]

声門閉鎖音 [ʔ]については、以下の3つの場合を区別する必要がある。

1. アラビア語借用語の声門閉鎖音
2. 母音の前に現れる声門閉鎖音
3. 子音群の最初の閉鎖音が声門閉鎖音になった場合

³⁵ "Sözü edilen ünsüz, içseste ve bir ünlüden sonra gelirse <kaygı>, çıkış biçimi bakımından [i] ünlüsüne benzediğinden örnek sözcükte [ai] ünlüleri yan yana gelmiş, çatışmış kabul edilerek, başka deyişle, dil [a] ünlüsünün çıkışında aldığı biçiminden [i] ünlüsünün çıkışında aldığı biçime doğru kaydığından bir ünlü kayması olduğundan sesbilim yazımla [kalgı] biçiminde yazılabilir. [bkz.: 2.0.4.] Fakat ünlü kaymasını içirme yanlısı olmayan dilimizde [kajgı] biçimindeki yazım da olabilir." Selen (1979) p.102.

³⁶ Sezer (1986)にこの子音の脱落に関する記述がある。前舌母音、鳴音、あるいは /i/ の後で脱落する。例、öyle～ö:le 「それゆえ」、seyret～se:ret 「観る」、iyi～ii 「よい」。

このうち第3は閉鎖音の変異体である。Baldwin (1966)によれば、3人のインフォーマントのうち2人で、以下の子音群で閉鎖音が声門閉鎖音として発音されたという。/pm/ yapmak 「する」、/pv/ cevap vermedi 「彼は答えなかった」、/tl/ atlara 「馬たちに」、/tm/ işitmedi 「彼は聞かなかった」、/tr/ etrafındakilere 「周りの人に」、/kl/ uzaklardan 「遠くから」、/km/ çok meraklıdır 「彼はとても好奇心が強い」。

第1の声門閉鎖音は、アラビア語の知識があり、アラビア語風に発音した場合を除いて、標準的なトルコ語ではこの声門閉鎖音は発音しないか、代わりに先行母音を長音化する。以下にいくつか例を挙げておく。

借用語での変化	位置	例
声門閉鎖音の脱落・ 先行母音の長音化	子音の前	i?cab 「要求」 → icap /ica:p/ i?lan 「公布」 → ilan /i:lan/ mü?min 「イスラム教徒」 → mümin /mü:min/
声門閉鎖音の脱落・ 先行母音の半長音化	語末	eşya? 「品物」 → eşya /eşya·/ icra? 「実行」 → /icra·/ ikna? 「説得」 → /ikna·/
声門閉鎖音の脱落・ 先行母音はそのまま	子音の後	cür?et 「大胆不敵」 → cüret mes?ul 「責任のある」 → mesul sür?at 「速さ」 → sürat

上の表をみると長音化は規則的なことがわかる。アラビア語で声門閉鎖音が子音の前に現れる語は、トルコ語に借用されると声門閉鎖音が脱落し、先行母音が長音化される。一方、声門閉鎖音を語末にもつ語は、声門閉鎖音が脱落し、語末の母音が半長音化（表の中の /·/ の記号）する。³⁷ 最後にアラビア語において声門閉鎖音が子音の後にある場合は、トルコ語に借用されると声門音だけが脱落し、母音には変化が起きない。

第1と第3の声門閉鎖音を観察する限り、音素 /ʔ/ を認定する必要はないと考えられる。ところがこれに対して第2の声門閉鎖音があることで、語頭の位置では次のような最小対を想定できる。

³⁷ Ergenç (2002)の辞書はこの半長音を表記している。

語頭における無声閉鎖音系列

ʔay「月」～pay「割当」～tay「子馬」～kay(mak)「すべる」

ただし母音の前の [ʔ] は常に実現されるとは限らないようである。³⁸ したがって声門閉鎖音を標準的なトルコ語において音素として認定する必要はないと思われる。

7. 6. 2. /h/

声門摩擦音 /h/ は摩擦が弱く、しばしば脱落すると報告されてきた。³⁹ 最近この摩擦音の脱落について興味深い仮説が提出された。⁴⁰ Mielke (2003)によれば、声門摩擦音 /h/ は知覚可能性が低い位置で脱落するという。Mielke は /h/ が周りの音声環境と対比して知覚可能性が低い場合に脱落すると仮定し、320個の無意味語を用いて /h/ が聞こえる位置の知覚実験を行った。その結果、/h/ は無声閉鎖音や破擦音の近くにあるときよりも、鼻音あるいは側面音の近くにあるときに、より知覚可能性が大きいことがわかった。また /h/ は鼻音と側面音の前よりも、後に現れるときに一番知覚可能性が大きく、無声閉鎖音と破擦音の場合には、/h/ が後に来るときよりも、前に来たほうが知覚されやすいことがわかった。

/h/ の脱落			
位置	例	脱落	長母音化
鼻音・側面音の前	tehlike「危険」→ te:like	○	○
	mehmet「メフメット」→ me:met	○	○
鼻音・側面音の後	ilham「靈感」	×	×
	tenha「寂しい」	×	×
無声閉鎖音・破擦音の前	sahte「にせの」	×	×
	ahçı「コック」	×	×
無声閉鎖音・破擦音の後	şüphe「疑惑」→ şüpe	○	×
	meçhul「未知の」→ meçul	○	×
無声摩擦音の前	mahsus「特有の」→ ma:sus	○	○
無声摩擦音の後	ishal「下痢」→ isal	○	×

³⁸ Baldwin (1966) p.30.

³⁹ Sezer (1986)によると以下の位置で /h/ は脱落する。1) 継続音あるいは鼻音の前の音節末で (kahya～ka:ya「執事」, mahsus～ma:sus「特別の」, Mehmet～Me:met), 2) 母音あるいは無声子音の後の音節頭で (tohum～toun「種」, ishal～isal「下痢」)。

⁴⁰ Mielke (2003)のこと。

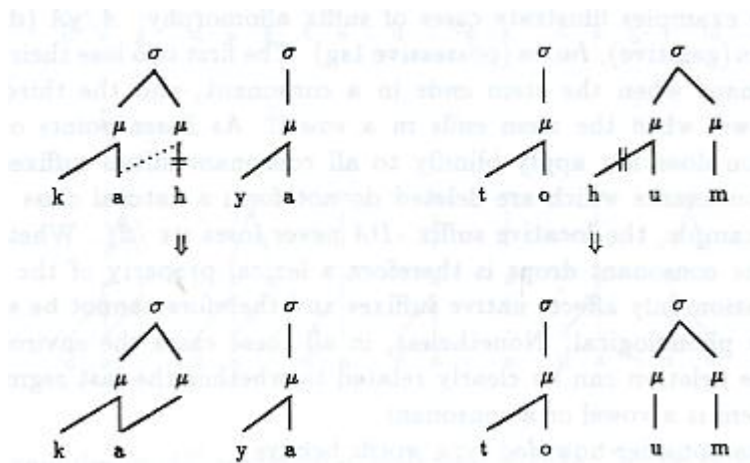
母音間	mühendis 「エンジニア」 → müendis	○	×
	tohum 「種」 → toum	○	×
語頭	hava 「空気」	×	×

Mielkeの実験結果は /h/ の脱落をうまく説明していると言える。/h/ 音の知覚可能性が低い音声文脈とは、鼻音・側面音の直前、無声閉鎖音・破擦音の直後、無声摩擦音の前後、母音間である。聞こえの大きい鳴音や母音の直前に位置すると無声摩擦音が知覚しにくくなるというのはよく分かる。また閉鎖音や破裂音の解放直後では気音との混同が予想され、また無声摩擦音の前後で同じ無声の /h/ が知覚しにくくなるのも納得がいく。

ところで音節末で /h/ が脱落するのに伴って、先行母音に代償延長が生じる。自律分節音韻論の枠組みでは、この代償延長は音節核(nucleus 下図左の -ah-)内で分節音が消去された結果生じるものであって、音節頭子音(onset 下図右の -hum の子音 /h/)が消去されても代償延長は生じることがなく、この点に音節核と頭子音の相違が見られるとする。また代償延長は、モーラを形成する核内で消去が起きた結果、「空のモーラ」(下図左の -a- の右側の μ) が生じ、それを埋め合わせるために延長が起きると主張する。⁴¹

核位置での消去

頭子音位置の消去



(Van der Hulst & van de Weijer (1991) p.30)

閉音節は上例のように2モーラを形成し(上図左の kah-), 開音節よりもモーラ数が多く, 「

⁴¹ 自律分節音韻論のこの解釈は説得力があるように思えるが、それに反して、ishal→isal の場合に代償延長が生じないことを説明した部分は説得力があるとは思えない。Van der Hulst & van de Weijer (1991) p.31.

閉音節は開音節よりも長い」という主張は、最近、Kopkallı-Yavuz (2003)によって実験的に確かめられ、トルコ語はモーラ言語的性格をもつとされる。これらを根拠とするならば、「空のモーラ」の埋め合わせのために先行母音が長音化するという主張は説得力がある。

7. 6. 3. /:/

この奇妙な音素表記 /:/ (この記号はふつう長母音を表す) は、林 (2000)や他の研究者からの借用である。これを /ğ/ で表記する者もいる。確かに元を糺せばこの音は、/ğ/の文字で表記される一連の語が問題になる。/ğ/ は現在でもアナトリアの東部方言で聞かれるように、昔は後部軟口蓋から前部口蓋垂で調音される摩擦音であった。ところが標準的なトルコ語では、この音は著しく弱化して脱落し、先行母音を長くするか、あるいは渡り的な接近音に変化した。長音記号 /:/ が用いられるのはそのためである。

/:/ には位置的な制約があり、語頭および他の子音の直後には現れない。実現の位置は以下の3種類である。

1	語末	çığ [çi:] 「生の」 dağ [da:] 「山」 yeğ [ye:] 「より良い」
2	母音間	boğaz [boaz] 「喉」 bağa [baa] 「亀の甲」 değil [deil], [dejil], [di:l] 「～でない」 soğuk [souk], [sowuk] 「寒い」 yeğen [yeen] 「甥」 yeğın [yein], [yejin] 「厳しい」
3	音節末	bağdaş [ba:daş] 「あぐら」 iğne [i:ne], [ijne] 「針」 öğle [ö:le], [öjle] 「正午」 sağcı [sa:cı] 「右翼」

母音間で /:/ は脱落し母音連続が聞かれるが、音声環境により渡り音の [j] あるいは [w] として実現することがある。このようなことから /:/ を「子音の特徴だけをもつ空の単位 (an empty unit as a segment merely containing the feature [+consonantal])」と解釈する研究者もい

る。⁴²

/:/ が長母音と異なる音素であることは、以下の例をみると明らかである。

dağ /da:/ 「山」、dağa /daa/ 「山へ」、bina /bina:/ 「建物」

この3つの例から、トルコ語ではアラビア語の外来語 *bina* に見られる長母音音素 /a/ と、固有語の *dağ* に見られる母音 +/:/, そして *dağa* のような母音連続 /a+/a/ を弁別しなければならないことがわかる。とくに長母音と母音 +/:/ は、上例の *dağa* /daa/ と *binaya* /bina:ya/ 「建物に」における両者のふるまいの違い、すなわち前者の子音音素 /:/ は母音間で脱落するが、長母音の /a/ は保持されることから全く異なる単位であることは明らかである。一方、次の例をみると、/:/ は音節末の位置で /h/ が消失したときとどう違うのか、必ずしも明確でないように思える。

dağlık [da:lık] 「山の多いところ」、tehlike → [te:like] 「危険」

しかしながら 7. 6. 2. で見たように、語末では /h/ は脱落しないから、両者は対立する2つの音素として認定される。

bağ /ba:/ 「紐」、sabah /sabah/ 「朝」

結論にかえて

筆者がトルコ政府給費留学生としてイスタンブール大学文学部トルコ学学科に留学していた1982-83年の頃、トルコ語の音声研究と言えば、参考文献にも名前が挙がっているアンカラ大学の Nevin Selen とイスタンブール大学の Ömer Demircan の2人が双璧を成していた。その当時、海外でのトルコ語の音声学、とくに音韻論の研究はそれほど活発ではなかったように思う。それがこの20年の間に、ヨーロッパではドイツとオランダを中心に、またアメリカ合衆国でも多くの音声学と音韻論の論考が現れるようになった。しかし状況が激変したのは、おそらくトルコ国内自体ではないだろうか。中でもボアジチ大学を中心に活発な研究活動や会議が開催される中で、多くの若手研究者が育ってきた。今ではアメリカ合衆国、ドイツ、フランスなどで博士号を取得し、トルコ国内に戻って教壇に立つ研究者の

⁴² Van der Hulst & van de Weijer (1991) p.35.

存在が日常化している。本稿をまとめながら感じた雑感である。

最後になるが、冒頭で述べたように、本稿は標準的なトルコ語の分節音に関する最近の諸研究のレビューであり、さらに興味の尽きない、しかしながら様々な問題が山積している超分節的現象、アクセント、イントネーションを扱っていない。この分野でも最近相次いで重要な研究が出版されている。今回はそれらのレビューをまとめる時間的余裕がなかったが、それらについても稿を改めて論じたい。

参考文献

菅原睦 (2002) 「現代トルコ語における正書法の変更」, 『語学研究所論集』, 第7号, 181-190.
林徹 (2000) 「トルコ語」, 亀井孝, 河野六郎, 千野栄一, 『言語学大辞典 第2巻 世界言語編 中 さーに』, 三省堂, 1383-1395.

Boeschoten, Hendrik. (1991) “Aspects of language variation”, *Turkish Linguistics Today*, Boeschoten Hendrik and Verhoeven Ludo, E.J.Brill, Leiden, 150-193.

Brendemoen, Bernt. (1998) “12 Turkish Dialects”, in Lars Johanson and Éva Á Csató (eds.) *The Turkic Languages*, Routledge, London and New York, p.236.

İmlâ Kılavuzu. (1996) Genişletilmiş ve gözden geçirilmiş yeni baskı, Türk Dil Kurumu Yayınları 525, Ankara.

Korkmaz, Zeynep. (1990) “Anatolian dialects”, in György Hazai (ed.) *Handbuch der türkischen Sprachwissenschaft*, p.388-413.

トルコ語音声学・音韻論関連

Aksan, Doğan ve N. Atabay, S. Özel, A. Çam, N. Pirali. (1978) *Türkiye Türkçeso Gelişmeli Sesbilimi*, TDK, Ankara.

Aşçı, Aline. (1997) "Groupes consonantiques et épenthèse en turc", *Turcica*, 29, 145-168.

Baldwin, J.R. (1966) “The glottal stop in Turkish”, *Le Maître Phonétique*, 126, 30-32.

Barker, Christopher. (1989) "Extrametricality, the cycle, and Turkish word stress", in J. Ito and Jeff Runner (eds.), *Phonology at Santa Cruz 1*. University of California, 1-33.

Bazin, Louis. (1962) “Note sur la fréquence des voyelles turques”, Németh Armağanı, János Eckman et al. (ed.), Ankara, 61-68.

Bazin, Louis. (1978) *Introduction à l'étude pratique de la langue turque*, Paris.

- Bergsträsser, G. (1918) "Zur Phonetik des Türkischen nach gebildeter Konstantinopler Aussprache", *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, 72,233-262.
- Bineth, George. (1967) "A contrastve analysis between English and Turkish vowel systems", *Language Learning*, 16, 3-4, 197-212.
- Csató, Éva Á and Lars Johanson. (1998) "11 Turkish", in Lars Johanson and Éva Á Csató (ed.), *The Turkic Languages*, Routledge, Lodon and New York, 203-235.
- Clements, George and Engin Sezer. (1982) "Vowel and Consonant Disharmony in Turkish", in *The Structure of phonological representations (PartII)*, Harry van der Hulst and Norval Smith (ed.), Foris, 213-255.
- Collinder, B. (1939) "Reichstürkische Lautstudien", Uppsala Universitets Arsskrift, Uppsala, 26-94.
- Demircan, Ömer. (1979) *Türkiye Türkçesinin Ses Düzeni Türkiye Türkçesinde Sesler*, TDK Yayınları 467.
- Demircan, Ömer (1996) *Türkçenin sesdizimi*, Der Yayınları, İstanbul.
- Deny, Jean. (1921) *Grammaire de la langue turque (dialecte osmanli)*, Paris.
- Deny, Jean. (1955) *Principe de grammaire turque*, Paris.
- Eliasson, Stig. (1985) "Turkish k-Deletion: Simplicity vs Retrieval", *Folia Linguistica*, 19/3-4, 289-311.
- Erem, Turgut ve Nureddin Sevin. (1947) *Milletlerarası Fonetik İşaretleriyle Konuşma Dilimiz*, Milli Eğitim Basımevi, İstanbul.
- Ergenç, İclâl. (1989a) *Türkiye Türkçesinin Görevsel Sesbilimi*, Ankara.
- Ergenç, İclâl. (1989b) "Dilimizdeki Ünsüz Yığılmaları Üzerine Bir Deneme", *Ortak Kitap* 89, Ankara, 248-285.
- Ergenç, İclâl. (1990) "Konuşma Dilinde Sözdizimiyle Bütün Olgularının İlişkisi Üzerine", IV. Dibilim Sempozyumu Bildirileri, 17-18 Mayıs 1990, A.S. Özsoy-H. Sebüktekin (eds.), Boğaziçi Üniversitesi yay., 157-165.
- Ergenç, İclâl. (1991) "<ğ> Üzerine", *Dilbilim Yazıları*, A.Sezer, S. Koç (eds.) Usem. yay., Ankara, 51-57.
- Ergenç, İclâl. (2002) *Spoken Language and Dictionary of Turkish Articulation*, Multilingual, İstanbul.
- Ergin, Muharrem. (1982) *Türk Dil Bilgisi*, 7. baskı, İstanbul.
- von Essen, Otto. (1956) "Satzintonation in türkischen Lesetexten", *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, 106 (N.F.31), 93-116.

- Godel, Robert. (1945) *Grammaire turque*, Genève.
- Hameed, Jumah. (1985) "Lexical phonology and morphology of Modern Standard Turkish", *Cahiers linguistiques d'Ottawa*, 14, 71-95.
- Hazai, György. (1978) *Kurze Einführung in das Studium der türkischen Sprache*, Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- van der Hulst, Harry and Jeroen van de Weijer. (1991) "Topics in Turkish phonology," in *Turkish Linguistics Today*, Hendrik Boeschoten and Ludo Verhoeven (eds.), E.J.Brill, 11-59.
- Inkelas, Sharon and Cemil Orhan Orgun. (1995) "Level ordering and economy in the lexical phonology of Turkish", *Language*, 71, 4, 763-793.
- Kaisse, Ellen. (1985) "Some theoretical consequences of stress rules in Turkish", *CLS*, 21, 199-209.
- Kaisse, Ellen. (1986a) "Locating Turkish devoicing", *WCCFL*, 5, 119-128.
- Kaisse, Ellen. (1986b) "Towards a lexical phonology of Turkish", in *A festschrift for Sol Saporta*, Michael Brame et al. (ed.), Seattle, 231-239.
- Kallestinova, Elena. (2003) "Voice and Aspiration of Stops in Turkish", *Folia Linguistica*, 38/1-2, 117-143.
- Kardeştuncer, Aino Evelin. (1982) "On the role of transition duration in the discrimination of velar stop consonants in Turkish", *Word*, 33/3, 243-252.
- Kawaguchi, Yuji. (1988) "Dimension perceptuelle des voyelles turques", *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, 42, 2-3, 339-360.
- Kılıç, Mehmet Akif. (2003) "Türkiye Türkçesi'ndeki ünlülerin sesbilgisel özellikleri", in A. Sumru Özsoy et al. (ed.), *Studies i Turkish Linguistics Proceedings of the Tenth International Conference in Turkish Linguistics*, Boğaziçi University Press, Istanbul, 3-18.
- Konrot, Ahmet K. (1981) *Towards Understanding Turkish Stress : an acoustic and perceptual study*, Ph.D.Thesis, University of Essex.
- Konstantinidis, Maria Skolidis. (1980) "L'Accent dans la langue turque parlée à Istanbul", *Travaux de l'Institut de phonétique de Strasbourg*, 12, 158-175.
- Kopkallı-Yavuz, Handan. (2000) "Türkçe'deki /v/'nin sesbilimsel ve sesbilgisel özellikleri", in *XIII. Dilbilim Kurultay Bildirileri*, A. Sumru Özsoy, Eser E. Taylan, Boğaziçi Üniversitesi Yayınevi, 99-107.
- Kopkallı-Yavuz, Handan. (2003) "Interaction between syllable structure and vowel length: Example from Turkish /a/", in A. Sumru Özsoy et al. (ed.), *Studies i Turkish Linguistics Proceedings of the Tenth International Conference in Turkish Linguistics*, Boğaziçi University Press, Istanbul,

19-26.

- Krámský, Jiří. (1990) "Phonetics and phonology", in György Hazai (ed.), *Handbuch der türkischen Sprachwissenschaft*, Teil I, Harrassowitz, Wiesbaden, 302-334.
- Lees, Robert B. (1961) *The Phonology of Modern Standard Turkish*, Indiana University Publications Uralic and Altaic Series, Vol.6, Indiana University, Bloomington, Mouton & Co. The Hague.
- Lewis, Geoffrey. L. (1983) *Turkish Grammar*, Oxford University Press, Oxford.
- Marchand, Hans. (1960) "On the phonological system of the Turkish vowels" *Acta Linguistica* 8, fasc.I, 21-31.
- Mielke, Jeff. (2001) "Perception in phonology: the case of Turkish /h/ deletion", *Chicago Linguistic Society* 37: The Panels, 59-71.
- Mielke, Jeff. (2003) "The Interplay of Speech Perception and Phonology: Experimental Evidence from Turkish", *Phonetica*, 60, 208-229.
- Nash, Rose. (1973) *Turkish Intonation. An Instrumental Study*. *Janua Linguarum, Series Practica* 114, Mouton, The Hague.
- Özen, Erhan. (1985) *Untersuchungen zu einer kontrastiven Phonetik: Türkisch – Deutsch*, *Forum Phonicum*, 30, Helmut Buske Verlag, Hamburg.
- Pierce, J.E. (1962) "An alternative analysis of Turkish segmental phonemes", *Anthropological Linguistics*, 4/3, 1-9.
- van Schaaik, Gerjan. (1996) *Studies in Turkish Grammar*, Harrassowitz Verlag, Wiesbaden.
- Sebüktekin, H. (1986) "Turkish Word Stress: Some Observations", *Türk Dilbilimi Konferansı Bildirileri*, A.A. Koç, E.E. Taylan (eds.) Boğaziçi Üniversitesi yay., 295-307.
- Selen, Nevin. (1968) "Fonolojik Statistlik" *Ankara Üniv. DTCF Dergisi*, cilt XXVI, 39-80.
- Selen, Nevin. (1969) "Dilin Melodisi", *Batı Dil Ve Edebiyatları Araştırmaları Dergisi*, 11.1, Ankara Üniversitesi Basımevi, 37-52.
- Selen, Nevin. (1973) *Entonasyon analizleri*, Ankara Üniv. DTCF yay. 231.
- Selen, Nevin. (1979) *Söyleyiş sesbilimi, akustik sesbilim ve Türkiye Türkçesi*, TDK yay., Ankara.
- Sezer, Engin. (1981a) "The k/ ϕ alternation in Turkish", *Harvard Studies in Phonology*, ed. by George N. Clements, 354-382.
- Sezer, Engin. (1981b) "On non-final stress in Turkish", *Journal of Turkish Studies*, 5, 61-69.
- Sezer, Engin. (1986) "An autosegmental analysis of compensatory lengthening in Turkish", in Wetzels, Sezer, *Studies in compensatory lengthening*, Foris, Dordrecht.

- Şayli, Ömer ve Levent M. Arslan (2003) “Türkçe’deki seslerin süre özellikleri”, *Dilbilim Araştırmaları*, 15-26.
- Swift, L. B. (1963) *A Reference Grammar of Modern Turkish*, Uralic and Altaic Series 19, Indiana University Publications, Bloomington.
- Tansu, Muzaffer. (1941) *Türk Dilinin Entonasyonu Tercrübî Etüd*, Ankara Üniv. DTCF Türk Dili ve Edebiyatı Enstitüsü Neşriyatı No.1(a), Ideal Basımevi, Ankara.
- Tansu, Muzaffer. (1963) *Durgun genel ses bilgisi ve Türkçe*, Türk Dil Kurumu Yayınları 222, Türk Tarih Kurumu Basımevi, Ankara.
- Tekin, S. Gernersheim. (1958) “Palatogramme türkischer Laute”, *Zeitschrift für Phonetik und allgemeine Sprachwissenschaft*, 11, 198-205.
- Tekin, Talat. (1991) “Türkçede Kelime Vurgusu Kuralları”, *Dilbilim Araştırmaları 1991*, Hitit Yayınevi, Ankara, 1-4.
- Underhill, Robert. (1976) *Turkish Grammar*, MIT Press, Cambridge.
- Underhill, Robert. (1988) “A Lexical Account of Turkish Accent”, *Studies on Turkish Linguistics*, S. Koç (ed.) Orta Doğu Teknik Üniversitesi yay. Ankara, 387-406.
- Vardar, Berke. (1975) *Une introduction à la phonologie*.
- Waterson, N. (1956) "Some aspects of the phonology of the nominal forms of the Turkish word", *BSOAS* 18, 578-591.
- Yusuf, Nevzat M. (1972) "Çağdaş Türk Dilinin Fonolojisi Üzerinde İstatistik Notlar", *Bilimsel Bildiriler 1972*, TDK yay., 151-155.
- Zimmer, Karl. (1970) "Some Observations on Non-Final Stress in Turkish", *Journal of the American Oriental Society*, 90, 160-162.
- Zimmer, Kar and Barbara Abbott. (1978) "The k/ϕ alternation in Turkish : Some experimental evidence for its productivity", *Journal of Psycholinguistic Research*, 7, 35-46.
- Zimmer, Karl and Aylin C. Küntay. (2003) “Turkish internal vowel harmony revisited”, in A. Sumru Özsoy et al. (ed.), *Studies i Turkish Linguistics Proceedings of the Tenth International Conference in Turkish Linguistics*, Boğaziçi University Press, Istanbul, 27-33.